



歴史と成功体験からの脱却

千

字 万 感

愛知時計電機株式会社
取締役会長 神田 廣一

当社は今年の7月で120年の節目を迎えます。

名古屋で時計産業が産声を上げたのは1887年(明治20年)のこと。アメリカ製輸入時計の販売を手がけていた名古屋の「林市兵衛時計店」が、この年に自らの手で時計製造を始めたとされています。当時、時計は西洋文明のハイカラな香りを伝えてくれる存在でした。国産時計の誕生を間近で見た人々が刺激を受け、その結果、国内に多くの時計メーカーが生まれ、名古屋だけで15社、全国で30社ほどが創立したと言われています。

その中で、当社は1892年に「愛知時計製造合資会社」を設立。1898年7月に「愛知時計製造株式会社」となりました。その後、時計製造で培った技術を活かして水道メーターの製造を開始。航空機製造などの軍需産業を経て、戦後の復興期には再出発を目指し、水道メーターの生産を拡大。更にガスメーター事業も軌道に乗せ、こうして、今もなお当社の大きな柱である二つの事業が始まりました。その後も新たな技術、新たな市場へと挑戦を続け、遅まきながら現在は海外にも拠点を開設し、グローバル化の道を邁進しています。

一方、創業以来の時計事業は、次の成長分野に注力するため1993年に幕を下ろしました。名古屋市の矢場町交差点に設置された「郷土三英傑・からくり人形時計塔」(和時計の筐体から、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康のからくり人形が登場して演技する)が、残念ながら当社が最後に手がけた大型設備時計となりました。

さて、中部経済連合会が今年2月に発表した「中部圏5.0の提唱」において、Society5.0に示された新社会像を実現するには、これまでの強みを支えてきたノウハウや成功モデルは必ずしも有効に働かないことを示唆しており、したがって、「人々に豊かさをもたらす人間中心の社会」を実現するためには、過去の延長線上ではない努力や能動的な行動が求められると結論付けています。

当社も120年の節目を迎え、これまでのものづくりにおける強みだけに頼ることなく、革新的なIoT技術を取り込み、自事業が社会へ貢献するビジネスモデルをモノからコトへとダイナミックに転換し、中部圏5.0の実現に一役買いたいと思います。